

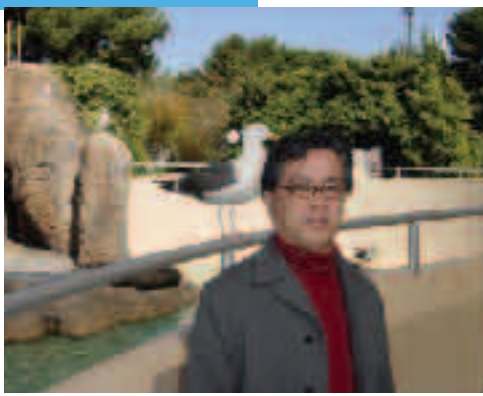
切削・充填から 接着・再生歯科医学を目指して



徳島での青春時代

歯学部歯学科 昭和58年卒業
大学院歯学研究科 昭和62年修了
岡山大学大学院 医歯学総合研究科
歯科保存修復学分野・教授

吉山 昌宏



私は1977年に大阪の茨木高校を卒業して徳島大学歯学部に入學しました。当時の徳島駅は木造平屋建ての粗末なもので、駅前には古ぼけたビルがなく本当に都落ちた気分がして悲しくなりました。蔵本キャンパスも未整備で、食堂などは旧陸軍の建物で雨が降ると周りは泥で定食も極めてまずいものでした。それでも住めば都で、同じアパートに住む同級生同土何かあると飲んだり、ドライブをしたり青春を謳歌することが出来ました。歯学部を卒業後は大阪の開業医で修業するつもりでしたが、今は亡き恩師である内田昭次教授に「大阪大学歯学部卒業生に負けない歯学研究者にならないか？」と大学院進学を勧められ、象牙質知覚過敏症(歯が沁みる病気)の研究で歯学博士号を取得することが出来ました。助手に採用されてから国際歯科雑誌に大学院時代の研究が掲載されるようになり、ぜひ世界で通用する歯学研究者になりたいと強く望むようになりました。

恩師であった内田教授が45歳の若さで急逝されてから、人生面でも研究面でも停滞していた時期がありました。もう大学をあきらめて開業でもしようかと考えていた1992年に、ジョージア医科大学歯学部のパッシユレイ教授からアメリカ力で研究してみないかと誘われ、94年にすぐるような思いで、ジョージア州オーガスタに留學しました。見るものすべてが輝いており、幸運にも2年間パッシユレイ教授と毎日歯の象牙質の接着剤の研究に没頭することが出来ました。この成果が20数編の英語論文として国際歯科雑誌に掲載されるようになり、アメリカが日本で教授になりたいと強く思うようになりました。

徳島大学から岡山大学への転進

帰国後当時の主任教授が大阪大学に帰ることとなり、私が37歳のときに教授選があり見事に落選しましたが、42歳のときに幸運にも岡山大学歯学部で教授に就任することになりました。岡山大学では歯を削って詰めるだけの旧式の歯科から、

接着歯学を応用し出来るだけ歯質を保存するモティブアイド・シールド・レストレーションを提唱するとともに、むし歯で失われた歯質を再生させる再生歯科医学の確立に日々心血を注いでいます。また現在、歯科医師は過剰時代を迎えており、歯学部付属病院は医学部付属病院に統合されてしまいました。国民の健康に対する歯科の重要性は少しも低下していません。さらにわが国の接着歯学は世界の最先端を走っており、ぜひ後輩たちが胸を張れるような歯科界にしてゆきたいと考えています。

後輩たちへのメッセージ

私が徳島大学の後輩たちに伝えたいメッセージは、「決して夢をあきらめない。必ずチャンスは来る！」というものです。また「周りの人からのネガティブな言葉に決して惑わされてはいけません。」ということ。とかく人間は「もうだめだ」と弱気になりますが、必ず救いの手はあります。また決して人まねをしてはいけません。「独創性」こそもっと

も大事な人生のパスポートだと私は思っています。その意味で、徳島大学卒業生は、あの有名な青色発光ダイオードの中村氏を筆頭に独創性にあふれていると思います。

最後に私の願い

実は私は単身赴任で家族は徳島に居り、徳島の風土と優しい人々のことはいまだに愛してやみません。定年の最後の三年でもいから徳島大学に帰って研究をしたいという夢は捨てていません。

